群教セ	G03 － 02
	平25.251集
	小・道徳

児童の道徳的判断力を高めるための道徳指導の工夫

――考えを深める話合い活動と板書の工夫を通して――

特別研修員　　竹内　正

Ⅰ　主題設定の理由

「はばたく群馬の指導プラン」では、生きる力の３要素の一つである豊かな心の面から見られた高学年の課題として、「学校生活をよりよくするために諸活動に取り組むことができる」を取り上げている。

道徳の授業場面における児童の発言は、単に中心資料から想像したことではなく、これまでの生活経験に基づく判断からなされている。学校生活をよりよくするための諸活動について、「このとき主人公は、どんな判断をしたのでしょうか」と問いかけた時、児童は主人公をとおした自分なりの判断を述べることになる。しかし、自分の判断をお互いに述べ合っただけでは、考えは深まらない。多様な考えを出し合い、お互いに深め合える話合いの工夫が必要となる。話合い活動を円滑に進めるためには、お互いの考え方をまとめ、発言内容の違いなどを構造的に整理することで、児童は異なる考え方にも目を向けることができるようになる。このように、友達の意見を受け入れ、思いやりをもって、友達とのかかわりを深めていくことが、道徳的判断力のある児童の育成につながると考え本主題を設定した。

Ⅱ　研究内容

１　研究構想図

思いやりの気持ちをもち、道徳的判断ができる児童の育成

道徳的判断力を高める

- 意見の類型化後に更に個々へ問い直す
- プレゼンテーションを使っての導入
- 動作化を取り入れた気づき
- 事前のアンケートの活用

- プレゼンテーションを使っての導入とまとめ
- 構造的な板書による意見の整理

- 意見を明確化した話合い
- 紙芝居を使った場面把握

大切にする心

資料名「星野君と定金君」２－（３）
重い障がいをもった友達を毎日おんぶして登校した少年の思いやりを考える資料

資料名「シンガポールの思い出」４－（１）
きまりを作れば日本もきれいになるという意見ときまりばかりでは本当の美しさは守れないという意見の対立を通してマナー作りについて考える資料

資料名「温かい言葉」２－（２）
思いやりや本当の親切とは何かについて考えさせる資料

児童の実態
・自己中心的な発言や行動に自分では気づけていない　・考えを深められる話合いができていない

2　授業改善に向けた手だて

(1)　道徳的判断力を高める話合いの工夫

中心発問に対するグループ内での意見交換をもとに、全体発表を行いお互い考えを共有化したうえで、もう一度中心発問について、個人の考えをまとめることで判断力を高める。

①ワークシートに自分の意見を書く。

②グループにわかれ、意見を発表し合いながら、多様な考ええ方にふれあう。

③全体の意見発表で、意見を類型化する。そして、もう一度度同じ発問について個々で考える。

④グループや全体での意見交流から得られた考え方、判断について考えられる力を付ける。

図１　多様な意見を出し合うグループでの話合いの様子

(2)　板書の工夫

児童の意見を類型化して整理し、主人公の考えを構造化していくことで、どのような道徳的判断が行われていたか、判断に焦点を絞って考えられるようにする。

①発言内容の違いを明らかにしながら、意見を類型化する。

②文字短冊や場面絵を貼って視覚的に見やすくすることで、児童が判断をしやすいように構造化する。

③プレゼンテーションを用い必要に応じて映像で説明する。

④児童の意見を、視覚的に分かりやすい板書の構成をすることで思考の流れを明らかにする。

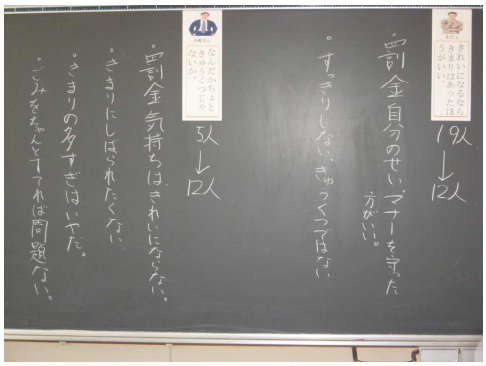

図２　発言内容を類型化した板書

Ⅲ　研究のまとめ

1　成果

○小グループになって話合ったことで、自分の意見が明確になり、自信をもって発表する児童が増えた。

○発言内容を類型化して整理したことにより、どのような道徳的判断をしたのか、考える視点が明確になり、より深く考えようとすることができた。

○全体での発表後、もう一度中心発問について個々で考えるようにしたことで、類型化された様々な考え方も参考に、深まった意見をワークシートに付け加えて書く児童が増えた。

○短冊や場面絵を生かし、考えの違いを板書したことにより、思考の流れや順序が分かりやすくなった。

2　課題

○小グループでの話合いを生かし、全体での意見発表に自分の考えと友達の考えの違いや似ているところを明らかにできるよう、整理する工夫が更に必要である。

○意見が偏った時に、少数派に対してだけ丁寧に意見を聞くと誘導となることがあるので、平等にゆさぶりをかける発問の工夫が必要である。

3　提言

○児童の考えを深めるために、発問、小グループの話合いからの類型化、全体での話合い、子どもたちの考えを揺さぶる発問、同じ発問の流れで授業を行うことで道徳的判断力が高めることができる。

○児童の意見は、類型化して、構造的な板書を行うと深い話合いに導くことができる。

○事前にアンケートをとり、普段どのような判断をしているかを生かして授業を行うと、資料を身近に感じ、中心価値についてじっくり考えられる。

Ⅳ　実践及び改善の実際

実践１

１　**主題名**　「みんなのために」　　４－（１）規則尊重・公徳心（第５学年２学期）

　　資料名　「シンガポールの思い出」（文溪堂）

２　本時について

シンガポールから帰国した「わたし」は、久しぶりに見た日本の町のよごれに気付き、友人にシンガポールの町の美しさについて語る。町の美しさが、罰金制度によって保たれていることを知った友人は、「本当にそれでいいのかな」とわたしに疑問を投げかける。わたしは、その一言がいつまでも心に残り、きまりで守られる美しさに対する問題意識に目覚める。

本時では、「わたし」と友人がきまりについて異なった考えを述べあっているところを、道徳的価値の判断場面としてとらえて、今までの自分たちの体験を踏まえて、きまりと公徳心との関係やきまりの在り方について考えることを通して、道徳的判断力を養えるようにさせたい。そして、進んできまりやマナーを進んで守ろうとする心を育てたい。

３　授業の実際

導入において身近な学校の写真から価値の方向付けを行った様子

プレゼンテーションで体育小屋の一輪車の写真を提示。

Ｔ：この写真から気付いたことを話してください。

Ｓ：一輪車がきれいに並んでいる。

Ｔ：片づけないと使わせてもらえなくなるよね。

次に教室のゴミ箱近辺の写真を見せる。

Ｔ：気付いたことを発表してください。

Ｓ：ゴミがちらかっている。

Ｔ：一輪車のように片付けられればいいのにね・・・

Ｔ：ではクイズを出します。きまりにはないけど、みんなで守ったほうがいいものって何でしょう？

Ｓ：マナー

Ｔ：きまりとマナーにはどんなちがいがあるか、今日はこのことについて考えましょう。

図３　価値の方向付けを行う資料提示

導入でこのように、プレゼンテーションを行いながら授業を進めた。身近な学校の写真や映像を使ったことで、自分たちにとって、きまりやマナーが、身近な課題であることに気付き、道徳的価値への方向付けをすることができた。

範読を行いながら、黒板には日本とシンガポールの場面絵を貼って、町の様子の違いを比較できるようにした。シンガポールの罰金制度については具体例（ごみの投げ捨ては 1000 ドル、道路に痰をはくと罰金 500 ドルなど）を示し、「きまりにすれば簡単だけど、本当にそれでいいのかなあ」という友人の声を聞いたとき、「わたし」はどんな判断をしたのか想像させた。また、黒板に腕組みした「わたし」の絵を提示し、考えを吹き出しに入れるようにした。

図４　吹き出しに書き込んだ判断理由

中心発問では次のような問いかけを行った。

きまりがあった方がいいというわたしに賛成ですか。それとも、規則に頼るべきではないという丹野さんの方に賛成ですか。

どちらの考えに近いかを決めるために、それぞれの立場から考え方と理由を述べた様子
Ｔ：グループで自分の考えに近い方の意見を紹介しましょう。 Ｓ１：「丹野さん」に賛成です。理由はそんなにきまりに縛られたくないから。 Ｓ２：私も「丹野さん」に賛成です。理由はきまりをたくさん作ると「罰金を払いたくないからきれいにしよう」という気持ちになって、「汚いのが嫌だからきれいにしよう」という気持ちがなくなってしまうから。 Ｓ３：「私」に賛成です。理由はマナーを守った方がいいから。 Ｓ４：ぼくも「私」に賛成です。確かに罰金はいやだけど、町がきれいになって歩きやすくなって、目の不自由な人とかも、たんとか踏まないと思う。

このような話合いの中で、友達と自分の考えを比較し、共通点、相違点を確認した。この後、全体で意見を類型化した。「私」に賛成派は、「罰金は自分のせい。マナーを守った方がいい」などの意見が、「丹野さん」に賛成派は、「罰金はとっても気持ちはきれいにならない」などの意見が出された。

表１　全体の話合いであげられた意見

美しくするためにはきまりは必要	きまりで守るのはちがう
・汚いよりきれいなほうがいい。 ・自分できまりを守れば罰金もとられずにすむ。 ・みんながきまりを守って町をきれいにすれば、いい町になる。 ・町がきれいになるし、みんなが気持ちよく過ごせる。 ・そんなに窮屈ではないし、汚いよりきれいのほうがいいから。 ・罰金は嫌だけれど、まちがきれいになればいいと思う。	・きまりで周りがきれいになっても、気持ちがきれいにならない。 ・きまりを作ると「罰金を払いたくないからきれいにしよう。」という気持ちになって、「汚いのがいやだからきれいにしよう。」という気持ちがなくなってしまうから。 ・町がきれいになっても罰金をとられたらいやだし、しばられたくない。 ・罰金をとっても、気持ちはきれいにならない。 ・心はきれいにしたいという気持ちがないときれいにしても意味がない。

下線部のような意見がでたのは、発問に対し深く考えられたからと考えられる。そこで、更に考えを深めさせるために、もう一度同じ質問をしてみた。すると７人の児童が意見を変更した。７人がなぜ反対側の意見に変えたのか聞いてみたところ、６人が黒板の意見を、一人がグループの時の話合いを元に意見を変更していた。また、ワークシートには、１回目の記述に、ほとんどの児童が理由を書き加えることができた。

まとめでは、中心資料から離れ、本田宗一郎さんが、大切にしていた、「世の中で一番大切なことは人に迷惑をかけないことだ。」という言葉を紹介した。そして怒られるからきまりを守るのではなく、相手を思う優しさ、人に迷惑をかけてはいけないという気持ちできまりやマナーを守ってほしいという説話を行った。

４　考察

○意見を板書で類型化して、整理しながら主人公の考えを構造化していくと、どのような道徳的判断が行われていたか、判断に焦点を絞って考えることができる。

○中心発問をした後に、グループ発表、全体発表をして、考えを共有化したうえで、もう一度中心発問を行うと、子どもの考えは深まる。

○場面絵は、絵から心の中を想像できてしまうことができるので、主人公の道徳的判断を問う時等、場面絵はシルエットにしておくと、多様な考えを出しやすくなると考える。

実践２

１　**主題名**　友達といっしょに　　２－（３）友情（第５学年２学期）

　　資料名　「星野君と定金君－星野仙一」（文溪堂）

２　**本時について**

５年生に進級した星野君は、筋萎縮症という病気で出席日数が足らずに進級できなかった定金君と同じクラスになった。星野君は定金君を送り迎えをしようと決心する。定金君の家と学校の間の片道30分の道のりを、毎日背負って登下校する。校内でも星野君と定金君の二人はいつも一緒だった。６年生になり、楽しみにしていた修学旅行が近づいてきた。しかし、星野君は定金君が修学旅行に行けないことを知る。そこで　星野君は、定金君の気持ちを確かめようとする。「センちゃん行きたいよ。行きたいけど無理だよ。遠足だって一度も言ったことが無いんだから」という返事に一瞬言葉につまった星野君だが、定金君を説得し一緒に行けるように周りの大人にお願いをする。

星野君と定金君の間に流れる心遣いに触れさせたい。そして、一緒に修学旅行に行きたいと願う星野君の思いを考えることによって友情のねらいにせまりたい。

３　**授業の実際**

動作化を入れた導入の様子
導入では動作化を取り入れた。友達をおんぶして実際に歩かせてみることで、おんぶして歩く大変さを体感させた。 30秒くらい、歩いたところで、感想を聞いた。 Ｔ：あとどのくらい歩ける？ Ｓ１：あと５分くらいなら・・・(背負っている児童) Ｔ：もし30分おんぶしてもらったらどう思う？ Ｓ２：悪いな・・・て思う。(背負われている児童)

このように動作化をさせることで価値への方向付けを行った。おんぶをした児童はおんぶをし続けることの大変さに気付けた。おんぶをしてもらった児童も、相手に申し訳ないという気持ち気付くことができた。学級全体で本時の価値である相手への思いやり、友情に価値の方向付けを行うことができた。

話合いの時の様子
Ｔ：４人グループになって言葉につまった星野君がどんなことを考えていたか意見交換をします。 ま　　だ書けていない子もいますので、その子は友達の意見をよく聞いてみましょう。 　グループで話合いをした後、星野君の考えたことを発表した。 Ｓ１：いっしょに行きたいのに何で行けないんだろう。(定金君に同情した意見) Ｓ２：ぼくがおんぶしていこうかな。(星野君の心の中を察した意見) Ｓ３：大人に言って何とかしてあげよう。(星野君の行動力を予想した意見) Ｓ４：連れて行きたい。でも無理かな。(定金君、星野君に同情するが周りの空気を読んだ意見)

このように小グループにすることで、意見を発表しやすくなり、星野君の気持ちを考えやすくすることができた。Ｓ１～Ｓ４の発言には（定金君に同情した意見）のように、どのような考えから発したものなのか理由を付けて補足していった。

星野君の気持ちをじっくり考えさせた後、中心発問では、「星野君は定金君と修学旅行に行けたと思いますか。行けなかったと思いますか。考えを予想した人は、続きの話を書いてみよう」と、すぐに発言するのではなく、一度ワークシートに書かせる活動を取り入れた。記述を見ると、全員が定金君は「行けた」と予想した。①「よし。ぼくがおんぶしていこう」、②「サダちゃん、いっしょに行こうよ。ぼくがおんぶしていくよ」、大人に反対されたが、センちゃんはどうしても行きたかったので、いっしょに行くことになった。③「星野君が必死にみんなにうったえて、センちゃんが行けるようになった」と書いていた。星野君ならなんとか連れて行くだろう。自分なら定金君を連れて行きたいと、友達を大切にすることの大切さに気付けていた。

友達がいてよかったと思う時のアンケート結果の様子
Ｔ：修学旅行に定金君と行けた星野君はどんな気持ちだったでしょう？ Ｓ１：うれしかった。 Ｓ２：いっしょに行けて良かったと思った。 Ｔ：一緒に楽しく行けて良かったですよね。 今週は人権週間ですね。ここで先日行った「友達がいてよかったと思う時はどんな時ですか」のアンケート結果の発表を行います。 １位　いっしょに遊んでいる時（一人で過ごすのは寂しいね） ２位　困った時に助けてくれた時（自分がつらい時、助けてもらえたら、うれしいね） ３位　相談にのってくれた時、話を聞いてくれた時５人、励ましてくれた時（話を聞いてもらえるだけでも、心がほっとしますね） ４位　さそってくれた時（自分からは入りづらい時、本当にありがたいね） 友達、大切だよね。人権週間に限らず友達を大切にしていきましょう。

このようにアンケート結果をプレゼンテーションで発表することで、円滑に授業を進めることができた。また、子どもたちも「１位いっしょに遊んでいる時」と発表した時、あらためて子どもたちは友達の大切さに気付き深く頷いていた。また、しっかり書くことはできるが、発表が苦手な児童の意見も反映させることができた。

この後、小学校卒業後のエピソードを紹介した。

定金君との交流は小学校を卒業して大人になっても続きましたが、彼は４１歳で亡くなっています。亡くなる少し前にも定金さんは「頑張って下さい。優勝して下さい。いつもぼくは見ています。」と星野さんに話していました。残念ながら星野監督が優勝したのは定金さんが亡くなった２週間後でしたが、定金君のお母さんは「息子が４１歳まで生きられたのは星野さんのおかげです。息子はいつも星野さんの活躍を見て、夢と希望をもらっていたんです。息子にとって、星野さんは同級生で神様だったんです。息子は幸せだったと思います。感謝しています。」と話しています。

図５　小学校卒業後のエピソード

このエピソードを元に、まとめでは「与えるものは、与えられる」という言葉を紹介した。何かを誰かに与えれば、それが返ってくるという意味だということを説明した。星野君は定金君に何を与えたか問うと「夢や希望」と、定金君は星野君に何を与えたか問うと「感謝の気持ち」と、意見が出された。自分がしたことは返ってくるということに気付かせることができた。与え、与えられよい友達関係を築いてほしいことを話して、道徳的価値について深く触れ直し、授業を終えた。

４　考察

- ○話合いの時、星野君の判断について書けない児童もいたが、話合い後はどのような判断をしたか書けていたので、友達の意見を参考に考えを深めることができていた。
- ○事前にとったアンケートの結果をプレゼンソフトで見せながら紹介したことで､みんなの考えを知り、友達の大切さについて気付くことができた。高学年になると発表する児童が減る傾向があるので、道徳においても、事前にアンケートをとり紹介することは授業を円滑に進めるのに有効であったと考える。
- ○板書を元に星野君の判断過程を整理して考えたことで価値に迫ることができ、「これからはこんなふうにしてみよう」という思いをいだくことができた。